

東京文化会館音楽資料室だより vol.22



古楽の世界 ～いにしへの響き・図書編～



いにしへの響きに耳を傾けるひとときはいかがでしょうか。

モーツァルトやベートーヴェンよりも遙か昔の音楽、「古楽」に焦点をあて、資料室のおススメ資料をご紹介します。改めて音楽の歴史を紐解いていくと、表現の形式は常に社会と密接な繋がりを持ちながら変化を遂げ、また楽器もその時代の発展と共に進化し続けてきた事が分かります。

今回ご紹介する本は、“「古楽」の世界をより深く知るために、その背景に広がる歴史や社会的背景についても知ることが大切な事のひとつではないか”という観点のもとに選びました。

それぞれのページを開き、その時代の音楽を知ること、当時生きていた人間の思いや社会情勢までもが自然と浮き彫りになる、そんな感覚も同時に味わうことが出来るのではないのでしょうか。



図書

「歴史」から音楽を紐解いてみよう1 ～シリーズを通してじっくり読みたい方へ～

■「プレントリスホール音楽史シリーズ」A.スィーほか著 ★請求記号:6.0-P973-1～8

1～8巻はそれぞれ〔中世社会、ルネサンス、バロック、古典派、ロマン派、20世紀、西洋民族、東洋民族〕の分野に分かれていて、それぞれの時代の音楽の歴史を広い視野から見て、分かりやすく教えてくれる。

■「西洋音楽の歴史」マリオ・カッロツォ,クリスティーナ・チマガッリ著 ★請求記号:6.0-C237-1～3

全3巻。1巻「起源から16世紀まで」、2巻「バロックからウィーン古典派まで」、3巻「ロマン派から電子音楽まで」。1巻は15の章から構成され、5つずつ3部に分けられている。それぞれの部の冒頭にイントロダクションがつけられ、続いて見ていく時代の中心的なテーマが明らかにされている。第一部「語り継ぐ伝承から書き記す伝承へ」、第二部「音楽形式の模索」、第三部「制作依頼主と音楽市場」。

■「グラウト/パリスカ新西洋音楽史」D.J.グラウト, C.V.パリスカ著 ★請求記号:6.0-G918-1～3

全3巻（上中下）。グラウト著「西洋音楽史」の改訂第5版である、グラウト,パリスカ共著「西洋音楽史」の全訳。原著となるグラウト氏の「西洋音楽史」は西洋音楽の歴史の流れを正しく理解するための適切な入門書として書かれた。上巻は「ルネサンス時代まで」、中巻は「バロック時代からベートーヴェンまで」、下巻は「ロマン主義以降」となっている。

「歴史」から音楽を紐解いてみよう2 ～写真や図版で理解を深めたい方へ～

■「西洋音楽史：音楽様式の遺産」ドナルド・H.ヴァン・エス著 ★請求記号:6.0-Es73

〔本書が同種の研究書と異なるのは、音楽と、その背景の文化との統合を目指している点であります。〕〔文化的あるいは“人文学的”な方法で音楽の展開をみつめることによって、読者は、各時代において、音楽がいかに発展し、いかに実践され、音楽様式がいかに形成されたかを理解できるでしょう。〕一著者による『日本語版への序』より

■「西洋音楽史大図鑑」スティーヴ・コリッソンほか著 ★請求記号:6.0-C697-22

6世紀頃から現代までの音楽作品の流れを全ページフルカラーでたどることができる。この本の1番の特徴は、曲が生まれた背景と生み出した作曲家に焦点を当てていることだろう。作曲家のエピソードや引用句も散りばめられている（巻末に引用句の発言者、出典あり）。

「古楽」に興味のある方へ

■「古楽再入門：思想と実践を知る徹底ガイド」寺西肇著 ★請求記号:6.0-T27-15

著者はまず日本で古楽の人氣が高まり、一時期おこった古楽ムーブメントについて語る。それを振り返ることは〔“今を生きる芸術”としてクラシック音楽が存在していく上でも必要不可欠ではないか〕と提示し、将来への展望にも触れていく。各項目ごとに「読む・聴く・観る」と題して書籍や録音、映像作品などの参考資料の掲載もある。

■「古楽のすすめ, 新版 オルフェ・ライブラリー」金澤正剛著 ★請求記号:6.0-K131-10

■「古楽とは何か：言語としての音楽」ニコラウス・アーノンクール著 ★請求記号:6.0-H229-97

楽器好きな方へ

■「楽器の歴史」エマーヌエル・ヴィンターニッツ著 ★請求記号:2.0-W735

ヨーロッパ・アメリカの博物館・美術館所蔵の由緒ある古楽器の中から、特に視覚的にも美しい名品として選びだされた100点が見られる図版。楽器の美しさが際立ち、見ているうちに〈どんな音なのだろう〉とその響きを実際に聴いてみたくなるはず。

■「中世・ルネサンスの楽器」デイヴィッド・マンロウ著 ★請求記号:2.0-M926

ヨーロッパの楽器が〔ヨーロッパ社会の中で、どんな階層の人々によってどんな場面で奏されたのかまで、その楽器のニュアンスとして思い起こせる人は非常に少ないと思う。それは恐らく、これらの楽器が我々〔日本人〕自身の生活的歴史の中に存在しなかったせいであろう。マンロウのこの本は、楽器学上の専門的情報と共に、各楽器が持っているこのような人間臭いニュアンスまでも生き生きと私たちに伝えてくれる。従ってヨーロッパ古楽の愛好家にとって、この本はまたとない読物なのである。〕— 『訳者まえがき』より

旅好きな方へ

■「古楽でめぐるヨーロッパの古都」渡邊温子著 ★請求記号:6.3-W29-16

■「旅ごころはリュートに乗って：歌がみちびく中世巡礼」星野博美著 ★請求記号:6.0-H792-20

古楽器リュートに魅せられた著者がキリスト教の深淵に迫るノンフィクション。舞台はイングランドからヴェネツィア、スペイン、コンスタンティノープル、アンダルシア、ラバト、聖地エルサレム、そして長崎。



雑誌で知りたい古楽

■「Entrée (アントレ)」

1987年に創刊し、2018年に終刊した古楽・古楽器に的を絞った国内唯一の情報誌。音楽資料室では1988年刊行分から所蔵している(※)。ヨーロッパの中世、ルネサンス、バロック、古典派の各時代の音楽を古楽器【オリジナル楽器および、その楽器をもとに近年作られた楽器＝ピリオド楽器】で演奏する音楽を取り上げていた。インタビュー記事や話題の情報、詳細なコンサート情報、新譜情報なども掲載。

※欠号もあるため、所蔵巻号はOPACでご確認ください。

